

機関番号：32670

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520715

研究課題名（和文） 台湾先住民アミと漢人の生活実践にみる「民族」と「伝統」
—身近な他者との交渉の諸相研究課題名（英文） The Ethnic Relations between the Taiwan Indigenous People 'Amis
and Han-Chinese : Focusing on the Everyday Life with Others Familiar in the Eastern Taiwan

研究代表者

西村 一之 (NISHIMURA KAZUYUKI)

日本女子大学・人間社会学部・助教

研究者番号：70328889

研究成果の概要（和文）：

台湾の日本植民統治期の出来事が、地域住民の手によって歴史あるいは伝統として位置づけられていく過程について文化人類学的研究を行った。台湾東部の地域住民（漢人と先住民）によって選択される、植民地期の事象や経験が、如何に扱われるのかを明らかとした。政治的民主化と社会の台湾化を経て、地域社会の中では民族意識を表明する機会が増え、観光開発の影響も受けて、「歴史」や「伝統」は、さまざまに意味づけられて資源化している現状を示した。

研究成果の概要（英文）：

I studied about the process that events of the Japanese colonial period in Taiwan were made significant as the history by the hand of local inhabitants. I analyzed that inhabitants how to recognize the events during the colonial period as their own history and traditions. After political democratization and under the Taiwanization, inhabitants increase the opportunities to express own ethnicities in a local community. "History" and "Tradition" are given meaning to variously and, under the influence of tourism, develop it into resources.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学／文化人類学・民俗学

キーワード：植民地主義、台湾、民族集団、歴史

1. 研究開始当初の背景

台湾の植民地主義をめぐる研究は、文献史学による精緻な歴史研究と口述史を中心とした微細な視点からの歴史人類学的研究と

が共同している。そこで明らかとされているのは、マクロな歴史とミクロな歴史の接合点に着目した、植民地台湾に暮らした台湾住民と日本人の姿である。しかし、歴史事象は現

代の文脈の中で繰返し問い直しが行われる。

研究開始当初、台湾東部に位置する調査地一帯では、1980年代後半以降から続く政治的民主化と本土化と呼ばれる台湾本位社会の形成を経る中、政府レベルでの台湾史の見直しが行われる一方で、地域社会における等身大の歴史や伝統について関心が高まっていた。そこでは地域住民による主体的な歴史認識が示されるが、こうした現象に対する人文社会学的な東アジア地域研究の蓄積は端緒についたばかりであった。

2. 研究の目的

台湾においては、近年、植民統治の「遺産」を巡る研究が、人文社会科学の領域で盛んに行われている。これに加え、民間レベルでも文化保存団体や地域振興の場で、独自の歴史や文化、伝統として日本植民統治期を含めた近い過去に対する関心は非常に高い。植民統治期に由来する事象を現在の状況下で焦点化するのには、その社会の人びとである。そこで、本研究においては、「遺産」を歴史として捉える主体、つまり台湾住民の活動に着目する。台湾東部にある調査地は、先住民アミと台湾漢人が共に暮らす日常が営まれている。本研究では、彼らが、地域の中に存在する植民統治期に関連する様々な事象を取捨選択し、自身の伝統や歴史として新たに位置づける過程を明らかとすることを目的とした。日本人による研究実践はややもすると、台湾社会に対する植民地主義的な認識の上塗りとなる危険をはらんでいる。本研究では、現在台湾の地域社会の中で住民たちの手によって進む記憶や経験の歴史化に焦点を当てる。

さらに本研究では、こうした台湾東部の地域社会における文化活動を通して、台湾漢人と先住民という異なる隣人との間で交わされる日常生活の中で表明される民族アイデンティティにも着目する。

3. 研究の方法

本研究の遂行においては、台湾東部に位置する調査地での対面的なインタビューと参与観察を中心とした文化人類学的フィールドワークを主に実施した。さらに、台北市にある研究機関や図書館などを利用した史料サーベイを採用し史・資料を収集した。

4. 研究成果

研究期間を通して、台湾台東県S町における文化人類学的現地調査を実施した。調査地は、漁港を柱とした中心部に台湾漢人が多く暮らし、その周辺に先住民アミの集落が海岸

線に沿うように点在している。彼らは互いに異なる隣人として接しながら日常を送っている。

先住民アミと台湾漢人が交渉する領域としてまず地域を代表する産業である水産業を取り上げて調査を実施した。その内容は、主に以下の2点である。1) 漁撈技術と民族集団そして「伝統的」漁法の構築。日本植民統治期の産業開発を契機として形成された調査地の水産業は、日本人移民事業を中心に展開し、この時に先住民アミと漢人の参入があった。さらに戦後大きく進展した近海漁業では、これら二つのエスニック集団出身の漁民が共同し、また競合してきた。現地調査に当たっては、台湾漢人および先住民アミそれぞれのカジキ突棒漁船主・船長を対象としたインタビューを実施した。彼らの間では、船長の地位を巡る共通認識があると同時に、保持する技術に対する高低や漁撈実践上の駆け引きが、エスニックな語りとともに示される。さらに、カジキ突棒漁は今、調査地の「伝統的」漁法として、町の住民から認識されようとしている。この新たに形成される「伝統」と、台湾漢人および先住民アミ漁民たちはどう向き合っているのか、技術をめぐる民族集団関係について調べた。これについては、2008年7月韓国プサン市で行われた国際シンポジウム「東アジアにおける植民地主義：文化・技術・移動—日本認識を巡って」および2009年7月台湾台北市で開催されたアメリカ人類学協会東アジア人類学会において報告を行った。2) 商業における民族集団関係と他者イメージ。台湾漢人と先住民アミとの交換や売買について、この二つの集団間の駆け引き行為に関する調査を実施した。例えば、1970年ころまでは漢人船長とアミの間には漁獲物と農産物との物々交換をする特定の相手があり、その結びつきは船長が船を降りた後も、形を変えて維持されていた。また、一般的な商取引の場面では、上位：漢人 下位：先住民というステレオタイプな民族関係の位相が表出し、これが調査地における固定化した民族イメージを生み出している。そこでは、漢人と先住民アミが典型的に抱く互いに向けた他者認識が描き出された。

加えて、調査地で進む過去の記憶や経験を、地域社会や民族集団の歴史として構築していく動きについて調査を行った。例えば、大正年間に発生した、ある抗日事件が調査地内の複数の場所で歴史化の対象となり、これを巡り様々な活動が実施され、多様な言説が生

まれている。その中には、民族集団の間で交わされるものがある。町では、独自の歴史や文化の保存伝承を目的とする民間団体が複数形成され活動を始めているが、その活動は、地域や民族集団の歴史や民族意識を代表する動きでもある。この点について、調査地の町にある小規模神社「祠」の跡地が利用されて公園化されていく様子を取り上げた。二つのアミ集落におけるこの「祠」跡地は、集落の民間団体と町役場が、それぞれ主体となり、それまで打ち捨てられていた祠跡を利用して神社様の建造物を作り、公園として利用している。この小規模神社と先の抗日事件が結びつけて取り上げられる点について調査を実施し、日本植民統治に対する認識について、そしてその歴史化への過程として注目した。ある公園では、かつての祠を「神社」として復元させ、老人たちの日本時代へのノスタルジー、今文化事業をになう現役層の独自の文化伝統に対する希求、そして彼らの活動の目的として掲げられるそれらの後世への伝承がなされる。ここでは、老人たちの祠をめぐる記憶と、現役世代たちの歴史認識とが混じりあう。もう一方の公園は、町の政治的リーダーの思惑と、先住民行政上の民族アイデンティティ発揚の機運の中で設置されている補助金制度の存在から生まれている。ここでは公園が置かれた集落の住民ではなく、町という枠組みが前面に出されている。いずれの公園も、神社を模した日本植民統治を象徴する建造物を配し、さらに抗日事件の顕彰をするという、地域社会における複雑な歴史認識が示される。また、付言すると、社会の台湾化の中で進む先住民行政および地域振興を目的とした観光行政からの補助金制度の存在は、こうした活動に大きな影響を与えている。

調査地がある台湾東海岸一帯は、先住民アミと漢人が混住する住民構成をもち、双方が民族アイデンティティを保持しながら日常生活を営んできた。日本植民統治期は日本（人）化、戦後の国民党政権下においては中華化が進められ、人びとはそれぞれの国民国家形成のなかでその民族アイデンティティ表明の機会が公的に奪われてきた。1980年代後半から加速化した台湾社会の政治的民主化は、各民族集団がその自己認識を新たにする契機となり、その拠り所として「伝統」や「歴史」の構築が進んでいる。また、この地域においては、1990年代より中央政府主導の観光開発が行われているが、その動きは構築が進む伝統あるいは歴史を、観光資源として消費する道を生み出している。こうした

点を踏まえ、最近設立した町の有志たちによって立ち上げられた文化団体に注目、具体的には2010年11月に開館した地方博物館をめぐる活動を調査の対象とした。さらに同じ地域にある先住民アミ集落の環境整備を主目的とした公的団体によって盛んにおこなわれる様々な文化活動についても調査を進めた。地域社会における文化団体が形成されたり、従来は地域整備を主目的とした団体が文化事業に積極的に取り組む動きは、民主化以降の台湾全体で起こっている出来事でもある。これらの団体は、調査地での過去の出来事が現在の社会状況のなかで、独自の歴史（あるいは伝統）として位置づけられ、特定の事象が選択され利用される際に意味付けの働きを果たしている。しかし、前者の町全体をその活動の対象としている文化団体は、漢人が主体となっており、もう一方の住民である先住民アミと連帯する機会は多くない。彼らは、「歴史」を正面に据えた、町の固有性を明らかとすることを主たる目的としている。そこでは、先住民アミの姿が後景へと押しやられてしまう。また、先住民アミは、集落ごとあるいはキリスト教宗派ごとの教会組織に基盤をおいた活動が主となり、その活動で前面に出るのは「アミ文化」「アミ集落」というエスニシティの表象である。それぞれが獲得を目指す補助金を設計する行政機関も異なっている。「歴史」「伝統」の主体性が異なり、一見町の中で盛んになっている文化事業は、実は多くの当事者が交錯しており、それぞれの歴史認識、伝統認識が並び立ち、時にそれは対立的でさえある。

さらに、港町としてその成立よりこれまで様々な人びとが行き交ってきた調査地において、近年台湾外から多くの出稼ぎ労働者や配偶者が住民として新たに加わってきた。多元社会であることを政治的に表明する台湾は、閩南系漢人、客家系漢人、外省人（1945年以降国民党とともに中国大陸から台湾に渡った人々とその子孫）、原住民族（台湾先住民の公的総称）からなる。と同時に、東南アジアや中国大陸から婚姻や就労による移民や移動がとみに増えている。調査地においても、こうした人びとが地域を構成する新たな民族集団、異なる隣人として生活を共にし日常が営まれる。漁業領域においても、1990年代半ばより、中国大陸からの出稼ぎ漁民「大陸漁工」と東南アジアからの出稼ぎ労働者が、操業には欠かせない状態となっている。「大陸漁工」は、中華民国である台湾と政治的に相いれない存在である中華人民共和国の国民（中国人）であるため、他の国からくる出稼ぎ者とは政治的に大きな違いがある。一方、大陸漁工は閩南中華を共にしており、調査地の閩南系漢人漁民と文化的基盤を同

じくすると認識されている。この新たな異なる隣人である「中国人」については、予備的な考察を含め 2010 年 11 月フォーラム「台湾をめぐる境域」(東洋大学)において報告し、その成果を公表した。民族集団の多様化が進む中で、地域の伝統や歴史はどのように構築され位置づけられていくのか、今後も調査を継続する予定である。

- (2)研究分担者
なし
- (3)連携研究者
なし

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 4 件)

- ①西村一之、「植民地期台湾における日本人漁民の移動と技術—「移民村」のカジキ突棒漁を例として」植野弘子・三尾裕子編著『台湾における〈日本〉』(風響社)、99-140 頁、2011 年、査読無
- ②西村一之、「台湾東部漁民社会における中国人—大陸漁工をめぐる民族関係—」『白山人類学』14、53-80 頁、2011 年、査読有
- ③西村一之、「台湾東部における「歴史」の構築：「祠」から「神社」へ」『日本女子大学紀要 人間社会学部』21、1-16 頁、2011 年、査読無
- ④西村一之、執筆部分「藤林泰・宮内泰介『カツオとかつお節の同時代史』小林多寿子編著『ライフストーリー・ガイドブック』(嵯峨野書院)、338-341 頁、2010 年、査読無

[学会発表] (計 3 件)

- ①西村一之、「台湾東部漁民社会における中国人漁民：大陸漁工をめぐる民族関係」、白山人類学研究会・東洋大学アジア文化研究所「境域」プロジェクト共同開催フォーラム「台湾をめぐる境域」、2010 年 11 月 6 日、東洋大学(東京都)
- ②西村一之、「The Technical Culture of Harpoon-fishing for Marlin at a Fishing Port of Postcolonial East Taiwan」、SEAA 2009 Taipei: Conference of the Society for East Asian Anthropology, American Anthropological Association, July 5 2009, Taipei, TAIWAN
- ③西村一之、「日本植民統治期台湾における漁民の移動と漁撈技術—「移民村」のカジキ突棒漁を例として—」、国際シンポジウム「東アジアにおける植民地主義：文化・技術・移動—日本認識を巡って」、2008 年 7 月 20 日、韓国・プサン市

6. 研究組織

(1)研究代表者

西村 一之(NISHIMURA KAZUYUKI)
日本女子大学・人間社会学部・助教
研究者番号：70328889